

海鷹丸遠洋航海の思い出

著者	石丸 隆
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	10
ページ	1-2
発行年	2014-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000478/

[寄稿]

海鷹丸遠洋航海の思い出

東京海洋大学 名誉教授 石丸 隆

Memories of the Distant Voyages of Umitaka Maru

Takashi ISHIMARU

1. はじめに

私は、平成元年に東京水産大学に赴任し平成 25 年 3 月をもって海洋科学部を退職しました。専門は生物海洋学、浮遊生物学で、練習船を用いた海洋生態系の研究や観測機器の開発に多くの時間を割きました。海鷹丸の遠洋航海には 9 回乗せて頂きました。海鷹丸Ⅲに 4 回とⅣに 5 回です。始めの 3 回はペルシャ湾（アラビア湾）の調査のため、残りは南極海調査のためです。これらのうち特に印象に残っている航海についてご紹介したいと思います。

2. ペルシャ湾航海

1991 年の湾岸戦争により海洋に流出した石油は 75 万ないし 110 万トンと言われ、2010 年メキシコ湾原油流出事故（推定 180 万トン以上）が起こるまでは、最大の流出事故でした。米国は NOAA の研究船マウント・ミッチェルを 1992 年 2 月から 6 月に派遣し調査を行いました（*Marine Pollution Bulletin*, Vol.27, 1993 参照）。日本政府は国際貢献の一環として、同様の環境調査のために研究船を派遣することを計画しましたが、まだ機雷が残っているとされる状況下でこれに応える機関は他になく、本学は政府の要請により海鷹丸を派遣することを決定しました。海鷹丸は、1993 年 1 月にカラチ（本学研究グループ乗船）ードバイ（アラブ首長国連邦；湾岸諸国研究グループ乗船）ードバイ（研究グループ全員下船）の航海を、同年 12 月にはドバイ-マナマ（バーレーン）間、1995 年 12 月にはアブダビ（アラブ首長国連邦）ークウェート間の調査を行い 3 年間でイランの領海を除くペルシャ湾全域の調査を終えました。各航海にはイランを含む湾岸諸国の研究者、研修員約 20 名と本学研究グループ約 20 名が乗船するという大所帯でした。海鷹丸Ⅲは、1973 年建造で建造後約 20 年を経て老朽化しており、観測機器等も古いものが多く、寄せ集めの機材を用いた観測であったこと、宗教的戒律、特に食事の制限やお祈りの時間などがあり、なかなか難しいことがありました。外国に出たことのない研修員などは、特に不安感を持っていたようですが、我々が誠意をもって接したことから次第に打ち解け、良い関係が築けたと思います。研究の成果は出版され（A. Otsuki, M. Y. Abdurhaem and R. M. Reynolds eds. *Offshore Environment of the ROPME Sea Area after the War-Related Oil Spill-Results of the 1993-94 Umitaka-Maru Cruises*. Terra Scientific Publ., c1998, 321 p.）貴重な資料となっていますが、残念ながらその後の国際共同研究にはつながりませんでした。

3. 南極海航海

海鷹丸は通算で 16 回の南極海調査を実施しており、今年は 17 回目を行います。海鷹丸Ⅱ（1955 年建造）は、国際地球観測年（1957）に向けた第 1 回の南極観測事業に「宗谷」の随伴船として参加し、その後、3 回の調査を行いました。海鷹丸Ⅲも、4 回の調査を行いました。そのうちの主要なものは「南極海海洋生態系および海洋生物資源に関する生物学的研究計画（BIOMASS 計画）」に関連した 1980 年度と 83 年度の通算 6、7 回目の調査で、いずれも私の前任の村野正昭先生が主席を務めました。私が乗船したのは、それから 12 年後の 1995 年度の航海で、3 回目のペルシャ湾航海の翌年です。参加者は、研究者 3 人、院生 7 人の小規模な観測でしたが、オーストラリア基地のある亜南極の島、マコーリー島を訪問し、ペンギンの営巣地やゾウアザラシの群れなどを見ることができました。また、事前に国立極地研究所に滞在していたオーストラリア南極局（AAD）のグラハム・ホージー博士と会い、同研究所の砕氷船オーロラ・オーストラリスによる調査ラインの一部を、時期を変えて観測することになりました。この縁はその後も長く続き、後で紹介する CEAMARC（Collaborative East Antarctic Marine Census）航海の実施につながります。また、この航海に乗船していた博士課程一年の平譯 享さんは、その後国立極地研の助手を経て現在、北大の准教授となり、修士一年の宮崎（堀本）奈穂さんと千葉早苗さんは、それぞれ本学助教、海洋研究開発推進機構主任研究員として極域研究に関わっています。

2000年に竣工した海鷹丸IVは、今年すでに9回目の南極海調査を行うこととなります。私は、そのうち2002年度（1回目）、04年度（2回目）、07年度（4回目）、12年度（8回目）に参加しました。2004年度は、ケープタウンを出て海鷹丸IIによる観測以来の昭和基地沖の観測を行い、フリーマントルに寄港し、再度南極海に入ってウィルクスランド沖の調査を行ってメルボルンで下船しました。ホージー博士もこの2レグに乗船されました。2007年度は、第1回の地球観測年から50年ぶりの極域共同観測年（IPY2007-2008）で、多くの国が参加して共同研究が行われました。この年、海鷹丸はケープタウンを出て昭和基地沖の観測を行い、さらに北大低温科学研究所との共同研究のためケープダンレー沖の観測を行った後、フリーマントルに寄港し、研究員の一部が交替しました。私は、フリーマントルから乗船しアデリーランド沖、ジョージVランド沖の観測（CEAMARC観測）を行い、ホバートで下船しました。CEAMARCは、AADが策定した生物多様性にかかわる国際共同観測です。オーロラ・オーストラリスは主に陸棚域の底生生物群集を中心とした調査を行い、海鷹丸は沖合から陸棚に至る海域の表層から深海までのプランクトンや魚類の調査を行いました。また、フランスチームの一部は海鷹丸に乗船して研究を行い、一部は砕氷船ラストローベやデュモン・デュルビル基地を拠点として陸棚のプランクトンや魚類に関する研究を行いました。外国人の参加者は5か国からの11名で、日本人の教職員、学生を合わせて28人で、記念写真には乗組員、専攻科生、研究グループ、取材陣を合わせて極めて多彩で多人数の乗船者が写っています。また、国際交流のシーンはデッキや研究室での観測、採集、サンプル処理の他に、右の列の写真にあるように、食堂で、ブリッジで、サロンでと船上のいたるところで見られ、極めて国際的な航海であり、様々な人々が交流を深めた様子が見られます。研究の成果も着々とあらわれており、海洋観測支援センターのホームページで業績をご覧頂くことができます。

4. おわりに

以上のように、海鷹丸は世界に開かれた観測研究、さらに教育の場として大きな成果を上げてきました。歴代の船長、乗組員の皆様には大変お世話になり有難うございました。専攻科生の諸君には、観測の手伝いをして頂き、また生活面でご面倒をおかけしましたが、いろいろな国の研究者と交流したり、最新の観測機器や技術に触れることができたりしたことは、面白くもありました、その後の社会活動においてお役にたったところも多いのではないかと思います。

運営費交付金がしだいに削減され、大学経営が難しくなる中で、練習船の維持や遠洋航海の実施はますます困難になると思われますが、練習船による教育・研究は本学の最大の特色であり、それを世間に発信していく大きな手段となります。練習船による教育・研究に携わる方々は、従来から外部資金を獲得し、また成果を学会、社会に示す努力をされてきましたが、なお一層の努力をお願いいたします。また、全学の皆様方には、長い歴史の中で果たしてきた練習船の大きな役割と、海洋基本計画でうたわれている海洋資源の開発利用、環境保全、海洋調査の推進、国際協力の推進、海洋に関する国民の理解の増進などに資する数少ない大学としての特色をご理解いただき、練習船に対しますますご支援賜りますようお願いいたします。

